

次の文章を読んで、後の問に答えなさい。

永観二年甲申八月二十八日、位につかせ給ふ、御年十七。寛和二年丙戌六月二十二日の夜、あさましく候ひしことは、^①人にも知らせ給はで、みそかに花山寺におはしまして、御出家入道させ給へりしこそ、御年十九。世を保たせ給ふこと二年。その後二十二年おはしましき。

あはれなることは、下りおはしましける夜は、藤壺の上の御局の小戸より出でさせ給ひけるに、有明の月のいみじく明かかりければ、「^②頭証にこそありけれ。いかがすべからむ。」と仰せられけるを、「^③さり」とて、とまらせ給ふべきやう侍らず。神璽・宝剣わたり給ひぬるには。」と、栗田殿のさわがし申し給ひけるは、まだ帝出でさせおはしまさざりけるさきに、手づからとりて、春宮の御方にわたし奉り給ひてければ、帰り入らせ給はむことは、あるまじくおぼして、^④しか申させ給ひけるとぞ。

さやけき影を、まばゆくおぼしめしつるほどに、月の顔に群雲のかかりて、少し暗がりゆきければ、「わが出家は成就するなりけり。」と仰せられて、歩み出でさせ給ふほどに、弘徽殿の女御の御文の、日ごろ破り残して御身も放たず御覧じけるをおぼしめし出でて、「しばし。」とて、取りに入りおはしましけるほどぞかし、栗田殿の、「^⑤いかに、かくはおぼしめしならせおはしましぬるぞ。ただ今過ぎば、おのづから障りも出でまうで来なむ。」と、そら泣きし給ひけるは。

さて、土御門より東さまに率て出だし参らせ給ふに、晴明が家の前をわたらせ給へば、みづからの声にて、手をおびたたく、はたはたと打ちて、「帝王おりさせ給ふと見ゆるは。天変ありつるが、

すでになりにけりと見ゆるかな。参りて奏せむ。車に装束疾うせよ。」といふ声聞かせ給ひけむ、^⑥さりともあはれには思し召しけむかし。「かつ、式神一人内裏にまゐれ。」と申しければ、目には見えぬものの、戸を押し開けて、御後をや見参らせけむ、「ただ今、これより過ぎさせおはしますめり。」と^⑦いらへけりとかや。その家、土御門町口なれば、御道なりけり。

花山寺におはしまし着きて、御髪下ろさせ給ひて後にぞ、栗田殿は、「まかり出でて、大臣にも、変はらぬ姿、いま一度見え、かくと案内申して、必ず参り侍らむ。」と申し給ひければ、「朕をば、謀るなりけり。」とてこそ、^⑧泣かせ給ひけれ。あはれに悲しきことなりな。日ごろ、よく、御弟子にて候はむと契りて、すかし申し給ひけむが恐ろしさよ。東三条殿は、もし^⑨さることやし給ふと、あやふさに、さるべくおとなしき人々、なにがしがしといふいみじき源氏の武者たちをこそ、御送りに添へられたりけれ。京のほどはかくれて、堤の辺よりぞうち出で参りける。寺などにては、もし、おして人などやなし奉るとて、一尺ばかりの刀どもを抜きかけてぞ守り申しける。

- (1) ①を口語訳しなさい。
- (2) ②について、「さり」とて」の内容を明らかにした上で口語訳しなさい。
- (3) ③の内容を説明しなさい。
- (4) ④について、次の各問に答えなさい。
 - (a) 「かく」の内容を説明せよ。
 - (b) ④全体を口語訳しなさい。
- (5) ⑤について、次の各問に答えなさい。
 - (a) ⑤全体を口語訳しなさい。
 - (b) 花山天皇が「あはれに思し召し」たのはなぜか。説明しなさい。

(6) ⑥の主語を本文中から漢字二字でぬき出しなさい。

(7) ⑦の理由を説明しなさい。

(8) ⑧の内容を説明しなさい。

(9) 道兼が、天皇の出家以前に天皇と約束していたことを、本文中から十字以内で抜き出しなさい。

(10) 次のア～ケの各文について、本文の内容に合致するものには○、合致しないものには×と答えなさい。

ア 花山天皇は人目を忍んで出家したが、そのときの年齢は二十二歳だった。

イ 有明の月が明るいからといって出家を思いとどまる花山天皇に、道兼は同情した。

ウ 道兼は自分自身が神璽・宝剣を春宮に移してしまったので、花山天皇が宮中に戻ることを快く思わなかった。

エ 花山天皇は、破り捨てずにとっておいた弘徽殿の女御の手紙を取りに戻ろうとした。

オ 道兼は、花山天皇の出家に対する真摯な思いに心打たれて、思わず泣いてしまった。

カ 安倍清明が式神を宮中に参上させようとしたところ、その式神は花山天皇たちと対面した。

キ 道兼は出家した花山天皇に仕えることを平素から誓っていたが、それは本心ではなかった。

ク 兼家は、道兼が花山天皇と一緒に出家してしまわないように、源氏の武者たちを護衛として付き添わせた。

ケ 源氏の武者たちは、賀茂川の堤の付近から隠れて後をつけていたが、京の町から姿を現した。

高校古典

大鏡「花山天皇の出家」(読解)

解答

(1) だれにもお知らせにならないで

(2) 有明の月があまりに明るく気が引けるからといって、今さら出家をおとりやめになつてよいものではないと、今さら出家をおとりやめにはいけないうこと。

(3) 神璽と宝剣が春宮に渡ってしまったからには、花山天皇が出家をおとりやめにはいけないうこと。

(4) (a) 花山天皇が弘徽殿の女御の手紙を取りに帰ろうとしたこと。
(b) どうしてこのように未練がましいお気持ちになられてしまうのですか。

(5) (a) 覚悟の上のご出家とは申しながらどんなに身にしみてお感じになったことでしょうか。
(b) 天皇が退位したという清明の言葉を聞いたから。

(6) 式神

(7) 道兼が約束を破って逃げ出したことを知り、自分がだまされていたことに気づいたから。

(8) 道兼が天皇と一緒に出家してしまうこと。

(9) 御弟子にて候はむ

(10) ア × イ × ウ ○ エ ○ オ ×
カ × キ ○ ク ○ ケ ×